

崇福寺は、近江大津宮へ遷都した天智天皇の勅願寺院といわれ、『続日本紀』や『万葉集』には「志賀山寺」などの別名でも登場します。奈良時代には大和の東大寺や薬師寺、興福寺、法隆寺などと並んで十大寺に数えられるなど隆盛をきわめ、天平12年（740）には聖武天皇も行幸し礼拝しています。平安時代以降は罹災と復興を繰り返して、また、山門（延暦寺）と寺門（園城寺）の抗争に巻き込まれるなどしてしだいに衰退し、鎌倉時代には廢寺となつたようです。

平安時代に成立した『今昔物語集』や『扶桑略記』、『三宝絵詞』には、崇福寺建立にまつわるつぎのような伝説が載せられています。天智天皇はかねてから寺を建立したいと願っていました。その願をかけた夜、天皇の夢枕に立った法師が「乾（北西）の方角にすべれた場所があります。早くごらんになってく

ださい」と告げました。天皇が驚いてその方向の山を見ると、火の光が立ち昇ってあたりを明るく照らしていました。翌朝、そこに使いを遣わすと、洞窟があつて怪異な老人がいると言います。天皇みずからそこに行つて老人を訪ねると、老人は「ここは昔、仙人の住んでいた霊窟です。さざなみや長等の山に」と言つて、消えうせてしまいました。天皇は「ここをさが探していた尊い霊地だとして、天智7年（668）に崇福寺を建てたというのです。

寺跡は、深い谷を挟んだ3つの尾根上に伽藍が営まれており、往時の礎石が残っています。戦前に2回発掘調査が行われ、中尾根から塔と小金堂、北尾根から弥勒堂と称される堂宇、そして南尾根から金堂と講堂とみられる堂宇が検出され、多量の瓦や土器のほか、奈良時代から平安時代に鑄造された「皇朝十二銭」のうち最初の和同開珎か

発掘された古代寺院 — 崇福寺 —



金仙滝と石窟

ら11番目の延喜通宝までの古銭や埴仏（タイル状の焼き物に半出による仏像をあらわしたもの）なども出土しました。中・北尾根と南尾根では礎石の形や堂宇の方向が異なり、前者からは7世紀後半代にさかのぼる遺物が出土する

となつています。調査が終了する間際到大発見がありました。中尾根塔基壇の中央部の地表下1・2尺から塔心礎が見つかり、心礎の側面にあけられた小孔の中に舍利容器と荘嚴具が納められていたのです。舍利容器は金銅製の外箱、銀製の中箱、金製の内箱が入れ子になっていました。金製内箱の中には金の蓋をつけた濃緑色の瑠璃（ガラス）壺が安置され、壺の中には舍利として3個の水晶粒が入られていました。荘嚴具には無文銀銭や瑠璃玉などがあります。まるでお伽話にあるような宝物です。寺院跡は史跡に、舍利容器は「崇福寺塔心礎内遺品」として国宝に指定されています。

なお、中尾根と北尾根のあいだを流れる谷川には、金仙滝と呼ばれる小さな滝と石窟があつて、先に紹介した崇福寺の縁起譚を彷彿とさせてくれます。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 平井美典）

塔心礎の小孔から “宝物”